

めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記。2022・9・23



童謡「めだかの学校」は小田原のメダカをモチーフに創られたことは皆さんご存じですね。作詞の茶木滋さんが散歩中に水路のメダカ見つけた時の子どもとのやりとりを思い出して、それが詩になったと伝えられています。作曲は中田喜直さん。♪夏が来れば 思い出す はるかな尾瀬 遠い空 の「夏の思い出」や「雪の降る街を」、「小さい秋みつけた」などを残してもいる当時の新進気鋭の作曲家でした。その中田喜直さんのフェリス女学院時代の教え子が小田原少年少女合唱隊を60年にわたり指揮者として指導する桑原妙子さん。写真は、合唱隊の皆さんがパトロールに参加され、終了後に日本新薬の食堂をお借りして「めだかの学校」「めだかの歌」「赤い鳥小鳥」の歌声を聴かせてくれた時のものです。その桑原妙子先生から、先日お手紙をいただきました。小田原少年少女合唱隊の幕を閉じます、というご挨拶でした。先生ご自身も数年前に手術をされたり、ともに合唱隊を指導しているピアニストでご息女の春子先生（ロンドン在住）も難病を抱えておられ、ロンドンがロックダウン中に一般の診療が受けられずにご病気が進行してしまい、もはや、いままでの内外での高い評価を維持させていくことは難しいと判断されたとのこと。OB・OGの「マルベリー・チェンバークワイヤ」も含めて、「小田原少年少女合唱隊」を解散し、お二人は指導から身を引き、次世代にバトンタッチしますという内容でした。内外の高い評価とサラリとおっしゃっていますが、とんでもないのです、特に海外での評価は格別で、名だたる多くの合唱団との共演や受賞実績などを顧みても、小田原が世界に誇れる「宝物」であったことは間違いありません。妙子先生は「子どもが集まらなくなって、子どもの合唱団自体も絶滅危惧種なのよ」とかつて僕に嘆いてはおられたのですが、ひとつの輝かしい小田原の「文化」が消えようとしています。今年12月のXmasコンサート、来年6月の60周年記念コンサート（どちらも三の丸ホール）がファイナルということでした。「めだかの学校」「めだかの歌」の2曲は、小田原少年少女合唱隊が音源のCDをめだかサポーターの会に残してくれています。「宝物」ですね。



「赤い鳥小鳥」もそうですが、小田原は北原白秋が10数年を居住して、たくさん名曲を残した土地です。「ゆりかごの歌」「からたちの花」「この道」「あわて床屋」「ペチカ」・・・代表曲のほとんどが小田原生まれ。市もホームページでは「童謡の街」と謳ってはいます。白秋童謡館の建物もある。城山から水之尾へ抜ける「白秋の散歩道」もある。3年ほど前の映画「この道」の制作には市はどれほど関与したのか、それは分からないのですが、せっかく「童謡の街」と謳いながら、積極的に市がこの文化資産を小田原の「売り」にしているとは感じられないのです。蒲鉾、梅干し、アジの干物といった味覚文化だけではない、「音楽という薫りの文化」の顔として、この北原白秋の童謡と小田原少年少女合唱隊の歌声を結び付けることは出来なかったのか、と桑原先生のお手紙をいただいてから痛切に思い始めています。「宝物」と「宝物」のコラボレーション。白秋は生涯1200ほどの童謡を創作しましたが、その半数以上は小田原で創られています。市の予算を投入して、何年の年月をかけてでも何百曲の音源づくりを少年少女合唱隊に託す事業は出来なかったのか、と残念です。商業も結構、工業も結構、でもこれからは「文化」の時代だと思うけどなあ。

開発も大事なんだろうけど、「文化遺産」はもっと大切。